

メトニミーとしての構文交替： 動詞と構文の意味の相互調整

富岡侑央

京都大学大学院

tomioka.yukihiko.43e@st.kyoto-u.ac.jp

要旨：本稿では壁塗り交替に代表されるような格体制の交替現象をドメインの焦点化として分析し、これが広義のメトニミーに属することを主張する。「塗る」や「片付ける」などの構文交替を起こす動詞はその意味構造に状態変化ドメインと移動ドメインが関わっており、そのいずれかが構文（格パターン）の意味との相互調整を経て焦点化される。これには作者で作品を表す表すメトニミーと同様の原理が働いている。また本稿ではこうした相互調整のプロセスを論じるために、構文交替に関わる動詞、格パターンの意味構造についても認知言語学的な意味観に基づいて考察する。

キーワード：構文交替、場所格交替、メトニミー、構文文法、ドメイン

1. はじめに

1.1. 構文交替とメトニミー

構文交替とは、同一の動詞が複数の構文パターンの中で現れる現象である。壁塗り交替（場所格交替）と呼ばれる以下の文の対はその代表的な例である。

- (1) a. ペンキで壁を塗る
b. 壁にペンキを塗る

(1a), (1b) はそれぞれ同じ事態を表した言語表現であるが、「塗る」に対する「ペンキ」と「壁」の格助詞が異なっている。これは「A デ B ヲ V」⇔「B ニ A ヲ V」というパターンの交替である。このとき構文交替を起こす動詞を本研究では交替動詞と呼ぶことにする。別の例として次のようなパターンの構文交替も確認される。

- (2) a. 部屋からゴミを片付ける
b. 部屋を片付ける

(2) は「A カラ B ヲ V」⇔「A ヲ V」という交替である。この交替では、(2a) の「ゴミ」に当たる要素が (2b) では現れないことが特徴的である。

こうした交替現象はしばしばフレーム内でのメトニミーとして扱われる。西村 (2002) は以下のような構文交替の例について、単一のフレームの異なる部分が焦点化された換喩的な表現であると分析している。

- (3) a. 部屋中に本が散らかっている.
 b. 部屋が本で散らかっている.
 (4) a. パイプにゴミが詰まっている.
 b. パイプが詰まっている.

(西村 2002: 297)

例えば (4) の交替については「詰まる」が、〈流体などを通す管を移動中のものが途中で移動しなくなることによって管が流体などを通しにくくなる〉というフレームを喚起し、(4a) では〈ものの移動停止〉、(4b) では〈管の機能不全〉が焦点化されたものとされる。

ただしこうした現象の制約については十分に考察されていないため、以下のような実際には交替が不可能な例で交替が可能であるという誤った予測をしてしまう可能性がある。

- (5) a. ペンキで壁を汚す
 b. *ペンキを壁に汚す

「汚す」の喚起するフレームの中には〈汚染物質の移動〉という要素が想定できそうであるが、それを焦点化した (5b) のような表現は容認されない。この事実を説明するためには「汚す」が喚起するフレームに〈汚染物質の移動〉が含まれていないとするか、もしくは含まれてはいるが焦点化はされないと分析する方策があるが、いずれにしても動詞の喚起するフレームの構成、及びフレーム内の焦点化のプロセスについてのより詳細な検討が必要である。

1.2. 本稿の主張と構成

本研究では構文交替を動詞の意味構造の中の異なる部分の焦点化とする点で西村 (2002) と軌を一にする。ただし本研究では構文交替を起こす動詞の意味構造を、フレームではなくドメインの集合であるドメインマトリクス (domain matrix) として捉える。また、焦点化のプロセスについては動詞の意味と構文の意味の相互調整¹による結果であると主張する。

続く2節ではメトニミーをドメインの焦点化とする考え方について紹介する。3節から5節では特に「塗る」と「片付ける」という動詞に注目してドメインが焦点化される過程を分析する。6節ではその他の交替パターンを持つ動詞についても同様の分析を行う。7節では動詞に関与するドメインを判定する方法について検討する。8節は本稿のまとめである。

1 ある種の強制 (coercion) とも言える。

2. メトニミー

本節では構文交替を動詞のメトニミーとして分析するための前提として、メトニミーをドメインの焦点化とする考え方について紹介する。

2.1. ドメイン

認知文法では、ある言語表現はそれに関わる様々なドメイン（言語の意味内容を構成する概念や経験の領域）を喚起し、ドメインの複合的な集合を形成すると考える (Langacker 2008: 2.2.1-2.2.2)。これをドメインマトリクスという²。例えば *glass* という概念には空間、形状、機能、素材、大きさなどのドメインが関わっており、これらがドメインマトリクスを構成する。以下の図1はある言語表現がドメインマトリクスを喚起する様子を表している。各楕円はドメインを、中央にある太線の円は言語表現のプロファイル示している。

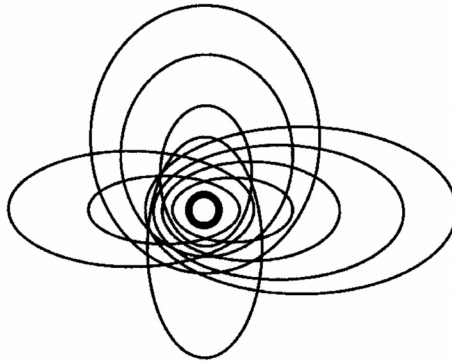


図1. ドメインマトリクス (Langacker 2008: 48)

また Croft (1993) ではドメインの「ある概念を理解するための背景知識」という特徴がベースとプロファイルの関係におけるベースの相当するとして、ドメインを以下のように定義している。

We can now define a domain as a *semantic structure that function as the base for at least one concept profile* (typically, many profiles).

(Croft 1993: 339)

このことから Clausner & Croft (1999) は〈尺度〉や〈容器〉などのイメージスキーマもドメインの一種であると主張している。本研究でもドメインについて Croft (1993) の定義を採用

2 Langacker (2008) では "domain matrix" ではなく単に "matrix" と称されている。

し、3, 4 節で動詞や構文の意味分析をする際にはその意味構造に関わるイメージスキーマ的な意味要素をその動詞に関与するドメインとして扱う。

2.2. ドメインの焦点化

Croft (1993) はメトニミーの必要条件として単一ドメインマトリクス内でのドメインの焦点化 (domain highlighting) を挙げている。例として作家で作品を表す以下のメトニミーについて考える。

(6) Proust is tough to read.

このメトニミーはプルーストのドメインマトリクスの一部が焦点化されたものとして分析される³。[PROUST] という概念には第一に〈人間〉というドメインが関与するが、作家として知られているために〈創作活動〉というドメインもここに関与することになる。(6) の表現はこの二次的なドメインである〈創作活動〉が焦点化されることで生じる。下図は (6) において [PROUST] の背景知識となるドメインマトリクスの中で〈創作活動〉ドメインが焦点化されている様子を表している。

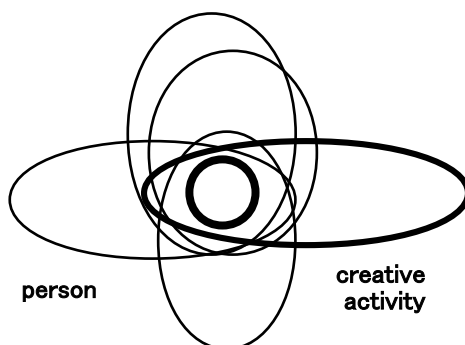


図2. [PROUST] のドメインマトリクスとその焦点化

また Croft (1993) によるとドメインの焦点化は自律的な要素の中で起こり、依存的な要素によって引き起こされるという⁴。つまり (6) では依存的な要素である *is tough to read* によって *Proust* の中で〈創作活動〉ドメインが焦点化がされることになる。

3 著者で作品を表す表現に関して角出 (2023) では単一の語彙単位の中の異なるファセット (cf. Croft and Cruse 2004: 5.3.1) として分析されており、メトニミーとは区別されている。本稿ではこれを広義のメトニミーとして考える。

4 自律的 (autonomous) / 依存的 (dependent) という概念については Langacker (1987) を参照。

(6) は名詞句の中でドメインの焦点化が起こった例であるが、自律性と依存性は相対的な関係であるため、例えば動詞と副詞の関係においては相対的に自律的な動詞の中でドメインの焦点化が引き起こされることになる。

- (7) a. She swore foully.
b. She swore loudly.

(ibid.:355)

(7a) では副詞 *foully* によって [SWEAR] に関わるドメインマトリクスのうち、罵りの内容に関わる部分が焦点化され、(7b) では副詞 *loudly* によって音量が焦点化される。

本研究では構文交替においてもこれと同様の原理が働いていると主張する。続く3節から5節では、依存的な概念を持つ格助詞のパターンによって自律的な動詞の中でドメインの焦点化が起こることを説明する。

3. 動詞のドメインマトリクス

ドメインは言語表現の理解に関わる知識や経験の領域であるため、名詞と同様に動詞についてもそのドメインマトリクスを考えることができる。本節では構文交替を起こす動詞として「塗る」、「片付ける」に注目し、それぞれの意味の理解にどのようなドメインが関わっているかを検討する。

3.1. 交替動詞の意味構造

多くの研究 (cf. 奥津 1981, 岸本 2001, Pinker 2013) で場所格交替を起こす動詞は移動と状態変化変化の両方の意味を持つと分析されている。例えば Pinker (2013) は場所格交替を起こす述語の特性について以下のように述べている。

What is special about an alternating verb is that it specifies the motion of an object or substance (and generally its manner of motion), making it eligible for the into/onto construction, and that this kind of motion predictably causes an effect on the surface that receives the substance.

(Pinker 2013: 94, 下線は筆者による)

この特性は日本語の交替動詞についても同様であり、例えば奥津 (1981) は「塗る」の意味について以下のように記述している。

＜動作主＞ガ＜対象1＞ヲ＜目標＞ニ付着サセ、ソシテ、ソノ＜対象1＞ヲ＜手段＞トシテ＜対象2＞マタハ＜始発＞ノ状態ヲ＜手段＞デ覆ワレタ状態ニ変エル

(ibid.: 58)

奥津 (1981) はこのことから「塗る」については付着動詞文と変化動詞文の両方をあわせたものと分析している。同様に以下のような交替を起こす「片付ける」についても物（ゴミ）の移動（離脱）と場所（部屋）状態変化を表すとされる。

- (8) a. 食卓カラ 皿ヲ カタツケル
 b. 食卓ヲ (*皿デ) カタツケル

(ibid.: 52)

3.1. 交替動詞のドメインマトリクス

以上の意味構造をもとに「塗る」や「片付ける」といった交替動詞の意味にどのようなドメインマトリクスが関与しているか検討する⁵。

交替動詞の意味構造を構成する〈状態変化〉や〈移動〉といったサブイベントは、人間の事態認知において基本的な意味要素であると考えられる。これらの意味要素を理解には〈状態変化ドメイン〉と〈移動ドメイン〉が関与していると考えられる⁶。

また「塗る」や「片付ける」は他動詞であるため、移動や変化を生じさせるように動作主が対象に働きかけるという意味も含まれている。このようなサブイベントは〈力動性ドメイン〉によって捉えられる。

交替動詞の意味構造にはこれら以外にも様々なドメインが関わると思われるが、本研究では動詞が喚起するドメインの網羅的な記述は目的としないため、差し当たって以上の3つのドメインのみを扱って議論を進める。

以上から、「塗る」、「片付ける」のように移動と状態変化を表す他動詞のドメインマトリクスは次のように図示することができる。

-
- 5 動詞のドメインマトリクスを分析した先行研究に Newman (1996) がある。彼は典型的な授与動詞である *give* の概念について〈時空間〉、〈支配〉、〈力動性〉、〈利害〉等のドメインからなる複合マトリクスとして分析している。ここで〈時空間〉とされるものは本研究における〈移動ドメイン〉に相当する。また〈支配〉は所有関係の変化に関わるドメインであり、これは広義の〈状態変化ドメイン〉に相当する。
- 6 このようなドメインはメタファーの分析においても想定されている。例えば *I came out of my depression* という表現は [CHANGES ARE MOVEMENTS] という概念メタファーの例とされる (cf. Lakoff and Johnson 1999: 182)。

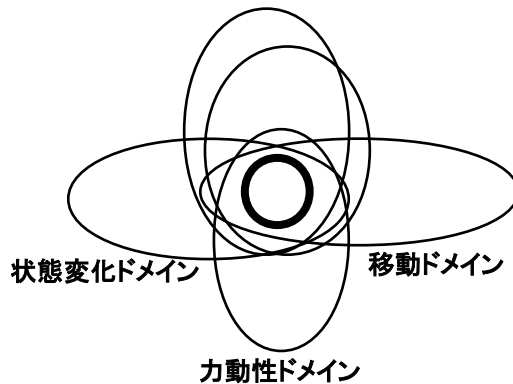


図3.「塗る」、「片付ける」タイプの交替動詞のドメインマトリクス

4. 格パターンのドメインマトリクス

文で表される事態の意味に寄与するのは名詞や動詞だけではなく、日本語においては両者の意味関係を明示するものとして格助詞が存在する。構文交替が「A デ B ヲ V」⇔「B ニ A ヲ V」、「A カラ B ヲ V」⇔「A ヲ V」のように格パターンによって規定されるものである以上、これらの格パターンの意味構造についても検討する必要がある。

4.1. 構文としての格パターン

構文文法では構成要素から予測できない形式的、機能的側面をもつ言語パターンは独自の構文であると認定される (cf. Goldberg 1995, 2006)。

(9) Pat sneezed the napkin off the table.

例えば (9) の文は「パットがくしゃみをしてナプキンをテーブルから吹き飛ばす」という意味を持つ。このとき移動の意味は *sneeze* という動詞ではなく [SUBJ [V OBJ OBL]] という構成要素のパターンに還元される。このように「構文」が動詞とは異なる特有の意味を持つとするのが構文文法の考え方である。

日本語においては名詞や動詞といった構成要素の他に「A ヲ B ニ」のような格助詞のパターンが存在し、こうしたものも独自の意味を持つ構文として考えることができる。例えば伊藤 (2008) は日本語の格パターンを構文として分析しており、以下のような構文の例を挙げている。

表 1. 各種構文の形式と意味

構文	形式	意味	
構文名	格パターン	イベント・スキーマ	基盤となるイメージ・スキーマ
存在	[_ニ_ガ]	《状態》	〈容器〉
変化	[_ガ_カラ_ニ]	《変化》	〈起点 - 経路 - 着点〉
一方向作用	[_ガ_ヲ]	《作用》	〈ベクトル〉
使役	[_ガ_ヲ]	《作用》 《変化》	〈ベクトル〉 〈起点 - 経路 - 着点〉
移送	[_ガ_ヲ_カラ_ニ]	《作用》 《変化》	〈ベクトル〉 〈起点 - 経路 - 着点〉

(伊藤 2008: 141 より一部抜粋の上再構成)

イベント・スキーマとは抽象化された基本的な事態の表象であり、本稿で設定したドメインに相当すると言える。《作用》は主体から対象への一方的に行為が向けられるイベント・スキーマであり、〈力動性ドメイン〉に相当する。《変化》については本稿では〈状態変化ドメイン〉と〈移動ドメイン〉を区別している。

4.2. 構文交替に関わる格パターンの意味

表 1 に見られるように [_ガ_ヲ V] を形式とするものには《変化》を意味に含む【使役】構文と《変化》を意味に含まない【一方向作用】構文があり、これらは同形異義である。以下の (10), (11) がそれぞれ【一方向作用】構文と【使役】構文の例に挙げられている。「壁を塗る」、「部屋を片付ける」における壁や部屋の状態変化はこの【使役】構文に相当すると考えられる⁷。

(10) a. 太郎がテレビを見る。

b. 太郎が戸を叩いた。

(ibid.: 172)

(11) a. 花子が家を建てた。

b. 花子がコップを割った。

(ibid.: 179)

7 伊藤 (2008) では「ペンキで壁を塗る」の格パターンに直接対応する [_ガ_デ_ヲ V] の形式を持つ構文の存在については想定されていないようである。

[_ガ_ヲ_カラ_ニ V] という形式の移送構文についてはプロファイルシフトによって3つの構文に拡張するとされる。それぞれ【着点的 - 移送】構文、【起点的 - 移送】構文、【略奪的 - 移送】構文である。

壁塗り交替におけるペンキの移動はこのうち起点が背景化し、着点がプロファイルされる【着点的 - 移送】構文に相当すると考えられる⁸。例として挙げられた (12) は形式的にも意味的にも交替動詞を用いた (13) に類似していることが分かる。

(12) 太郎が荷物をテーブルに置いた。

(13) 太郎がペンキを壁に塗った。

また「部屋からゴミを片付ける」におけるゴミの移動は着点が背景化された【起点的 - 移送】構文に相当する。この構文は [_ガ_ヲ_カラ V] という形式を持ち、次のようなものが挙げられている。

(14) 太郎が鍋からアクをとった。

(ibid.: 176)

以上から「塗る」や「片付ける」と共起する構文の意味には、動詞と同じく〈力動性ドメイン〉、〈状態変化ドメイン〉、〈移動ドメイン〉が関与していることが分かった。こうした意味は動詞、構文のいずれかが担うものではなく、両者がそれぞれ担っているものと考えられる。

4.3. 格助詞デの意味

「ペンキで壁を塗る」の格パターンに直接対応する [_ガ_デ_ヲ V] 構文の存在は確認できないが、その構成要素である格助詞「デ」の意味については多くの研究がされている。そこで本節では「ペンキで壁を塗る」における「ペンキ」の意味役割とデ格の関わりについて考察する。

日本語記述文法研究会 (2009) はデ格の用法を分類し、以下のような例を〈付着物〉という用法の例として挙げている。

(15) a. タオルが水で濡れる

b. 服がホコリで汚れる

(日本語記述文法研究会 2009: 76)

8 ただし表に見られるように [_ガ_ヲ_ニ V] という形式を持つものとしては他に【授受】構文があり、これらは同形異義構文ということになる。

「ペンキで壁を塗る」における「ペンキ」も「何かに付着し、それを変化させる」という点で (15) の用法に属すると言える。次にこうした意味役割がデ格の用法としてどの程度典型的なものなのか検討する。

森山 (2008) はデ格の意味構造（プロトタイプ、スキーマ、カテゴリー構造）について以下のように考察している。

- ・ デ格のスキーマ的意味は、前景となる動力連鎖の参与者の背景を補足的に表す 格（背景格）である
- ・ 「背景」は大きく「空間的背景」と「役割的背景」の2通りに分けられる
- ・ 「空間的背景」のプロトタイプの意味は〈場所〉である
- ・ 「役割的背景」のプロトタイプの意味は〈道具〉である
- ・ 全体のプロトタイプの意味は〈場所〉である

ここでプロトタイプの意味とされるのは〈場所〉や〈道具〉であり、〈付着物〉はデ格の中でも周辺的な用法と考えられる⁹。そのため〈付着物〉の意味は格助詞というより名詞句と動詞句の意味が寄与する割合が大きいと考えられる¹⁰。

5. 動詞と格パターンの意味の調整

3 節では動詞の、4 節では格パターンの意味についてどのようなドメインが関わっているのかを確認した。本節では両者のドメインマトリクスの相互作用によって最終的に節レベルの意味として焦点化される要素が決定されることを説明する。

Croft (1993) ではドメインの焦点化は依存的な要素によって引き起こされ、自律的な要素の中で起こるとされる。動詞と格パターンを比較すると、相対的に動詞の方が自律的であり、格パターンの方が依存的であると考えられる。よって本研究では格パターンによって動詞の中でドメインの焦点化がされると分析する。

次に動詞と構文の意味の相互作用について検討する。語彙の意味は豊かな百科事典的知識と結びついており、そのドメインマトリクスも非常に複雑なものになる。そうした要素が関わる相互作用の詳細なプロセスについては本研究の射程を超えるため議論しないが、最も単純には両者に共通するドメインはそうでないドメインよりも相対的に焦点化されると考えられる。下の図は交替動詞の意味と構文の意味の間にドメインの対応関係があることを示している。

9 森山 (2008) は〈道具〉から派生した用法として〈材料〉、〈構成要素〉、〈原因〉、〈理由〉、〈根拠〉、〈目的〉、〈様態〉を挙げているが、この中にも〈付着物〉に相当するものは見当たらない。

10 ただし〈付着物〉はデ格のスキーマ的な意味である「役割的背景」には適合するため、〈付着物〉の解釈には格助詞もある程度は寄与していると言える。

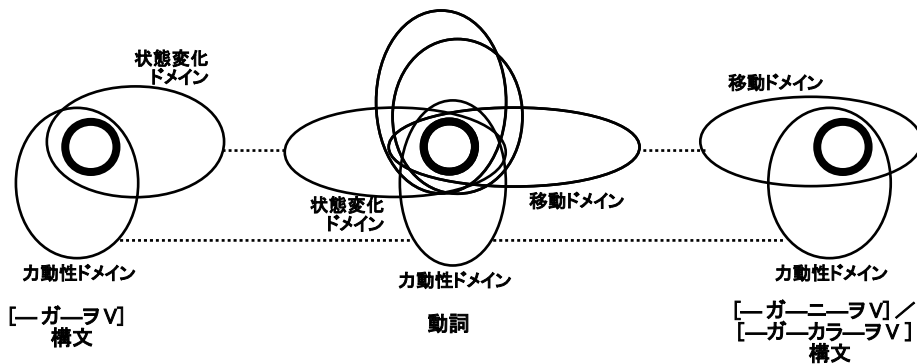


図4. 構文と動詞の意味の調整

交替を起こす動詞が「[-ガ-ヲ V]」構文、「[-ガ-ニ-ヲ V]」／「[-ガ-カ-ヲ V]」構文と共起したとき、それぞれ対応するドメインが下図のように焦点化されることになる。

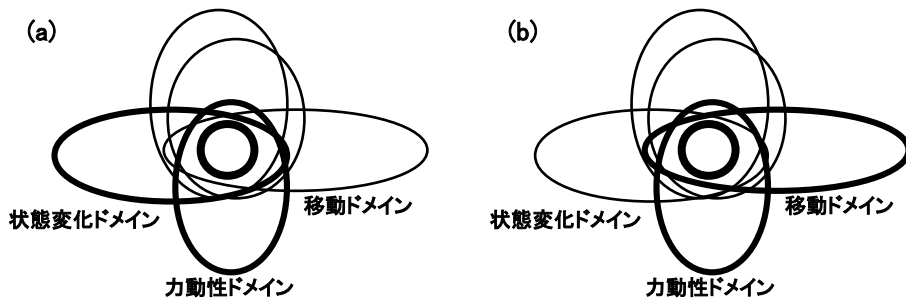


図5. 交替動詞におけるドメインの焦点化

このように動詞や構文の意味をドメインマトリクスから捉えることで、Croft (1993) が例に挙げる作者で作品を表すメトニミーなどと類比的に考えることができる。

6. その他の交替パターン

前節までで分析の対象としたのは「塗る」に代表される「A デ B ヲ V」⇔「B ニ A ヲ V」というパターンの交替現象、及び「片付ける」に代表される「A カラ B ヲ V」⇔「A ヲ V」というパターンの交替現象だけであった。

本節ではその他の交替現象として「餅くろみ交替」と呼ばれている交替現象、そして自動詞による場所格交替についても簡単にではあるが考察する。

6.1. 餅くるみ交替

以下のように「くるむ」、「包む」といった動詞は「A デ B ヲ V」⇔「B ニ A ヲ V」というパターンの交替を起こす。川野 (2021) はこれを「餅くるみ交替」と呼んでいる。

- (16) a. 桜の葉に餅をくるむ
 b. 餅を桜の葉でくるむ
 (17) a. 風呂敷に本を包む
 b. 本を風呂敷で包む

(川野 2021: 49)

「くるむ」、「包む」という動詞で表される事態は、その背景知識として「餅／本」の状態変化という〈状態変化ドメイン〉、「餅／本」の移動という〈移動ドメイン〉、それらが動作主によって引き起こされるという〈力動性ドメイン〉が関わっていると考えられる。この点は「塗る」タイプの交替と同じである。

ただし (16), (17) が「塗る」と異なるのは、「塗る」では移動の着点を変化の主体と対応させているのに対し、餅くるみ交替では移動の主体を変化の主体と対応させていることである。これは「どのような要素が変化したのか」という点で両者で以下のような解釈の違いが生じるためである¹¹。

壁塗り交替：移動の着点は移動物が付着することで変化する。

餅くるみ交替：移動物は、着点によって覆われることで変化する。

移動事態に関わる全ての要素は何かしらの点（位置、見た目、用途など）で変化すると言える。そのうちどれを変化の主体として選択するかは焦点化するドメインの違いではなく、landmark 割当の問題である¹²。

6.2. 自動詞の場所格交替

以下は「A ガ B デ V」⇔「B ニ A ガ V」というパターンの交替現象である。

- (18) a. 部屋が本で散らかる
 b. 部屋に本が散らかる
 (19) a. パイプがゴミで詰まる
 b. パイプにゴミが詰まる

11 「くるむ」や「包む」は「塗る」と異なり、意味的にどちらかが移動物でどちらが着点かが明確ではないということもこの解釈に影響する。

12 trajectory/landmark alignment (cf. Langacker 2008: 3.3) と同様の操作と言えるが、割当ては主語と目的語の間で起こるわけではなく目的語と斜格句の間で起こる。

伊藤 (2008) は [_ニ_ガ] 形式を持つものとして【存在】構文を提案しており、本研究でも (18b), (19b) を【存在】構文の事例として扱う¹³。あるものがある場所に存在するという事態の理解には〈存在ドメイン〉が関与する。

[_ガ_デ] の格パターンを持つ (18a), (19a) についてはデ格と伊藤 (2008) の言う【変化】構文を組み合わせたものとして理解することができる¹⁴。これには〈状態変化ドメイン〉が関わっている。

また自動詞である (18), (19) は「塗る」等とは異なり使役者によって事態が引き起こされるというサブイベントを含んでいないため〈力動性ドメイン〉は関与しない。

以上から「散らかる」、「詰まる」の意味構造に関わるドメインマトリクス、及び (18a), (19a) と (18b), (19b) で特定のドメインが焦点化される様子は以下のように図示される。

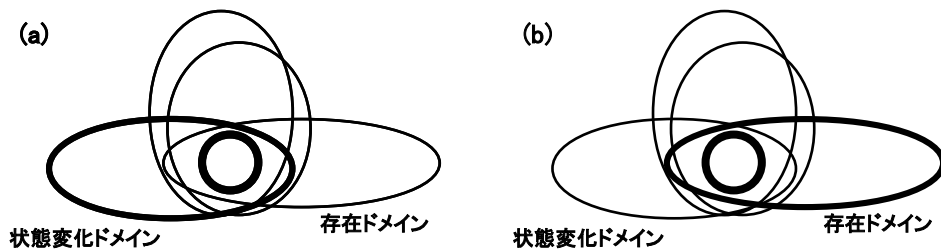


図 6. 自動詞の場所格交替によるドメインの焦点化

7. 関与するドメインの判定

本研究の主張するモデルに従うと、動詞が構文交替を起こすためには動詞の意味構造に〈移動ドメイン〉（もしくは〈存在ドメイン〉）と〈状態変化ドメイン〉の両方が関与していることが必要となる。ただし議論の循環を避けるためにはこうしたドメインの関与を動詞の交替可能性とは独立に判定する必要がある。本節ではそのための方法について検討する。

7.1. 〈移動ドメイン〉の確認方法

「A デ B ヲ V」という形式で現れる全ての V について「B ニ A ヲ V」という形式に交替が可能というわけではない。「B ニ A ヲ V」形式で現れない動詞は、その意味構造に〈移動ドメイン〉が関与していないことを意味する。このとき〈移動ドメイン〉の関与は移動の様態、も

13 或いは伊藤 (2008) の提案する、[_ガ_ニ] 形式を持つ【着点的・変化】構文と考えることもできる。

14 厳密には [_ガ_カラ_ニ] 形式を持つ【変化】構文から起点と着点が背景化したもの。

しくは様態を想起させるような移動物の特性が動詞によって指定されているかという点からある程度判別可能であると考えられる。

- (20) a. ペンキを壁に塗る
b. *ペンキを壁に汚す

「塗る」については考えると、典型的には刷毛のような道具で塗り上げられるという様態が指定されている。これは移動の様態であるため〈移動ドメイン〉が関与していると考えられる。一方で「汚す」についてはどのような様態であっても結果的に汚れていれば「汚す」の意味と矛盾しないため、汚染物質の移動の様態について動詞による指定はないと考えられる。このことから「汚す」には〈移動ドメイン〉の関わる余地は無いと考えられる。

交替可能な他の動詞を見ても、移動の様態に関して何らかの指定があることが分かる。

- (21) a. グラスを水で満たす
b. グラスに水を満たす
(22) a. 懐中電灯で暗闇を照らす
b. 懐中電灯を暗闇に照らす

「満たす」は移動物が液体や気体であること「照らす」は移動物が光であることを指定し、その移動様態も自然と「流体的な動き」、「光の照射」であることが示唆される。このことから「満たす」や「照らす」に〈移動ドメイン〉が関与していることが分かる。

7.1. 〈状態変化ドメイン〉の確認方法

ある事態に参与する全ての事物について何らかの点での「変化」を見出すことができる。しかしその全てに〈状態変化ドメイン〉が関与するとなれば言語使用の実態（【変化】構文におけるガ格、【使役】構文におけるヲ格になる要素が決まっていること）を適切に捉えることができない。したがって〈状態変化ドメイン〉が関与するのは特に人間の関心を引く、際立ちの高い変化に限られると考えられる¹⁵。

際立ちの高さを判断する基準として「影響が対象の全体に及ぶか」という点を考える¹⁶。

- (23) a. グラスに水を（満たす／注ぐ）
b. グラスを水で（満たす／*注ぐ）

15 これは主語、目的語を事態の中の際立ちの高い要素として特徴づける認知文法 (cf. Langacker 2008) の考えに即している。

16 これは Hopper & Thompson (1980) の挙げる他動性の基準の一つ AFFECTEDNESS に相当する。また当然ながらこれが変化の際立ちを判定する唯一の基準というわけではない。

(23b) に見られるように、「満たす」はガラスの状態変化としての読みが可能である一方で「注ぐ」ではそれが不可能である。これは「満たす」がガラスの内側の全体に作用することを意味するためである。また以下に見られるように「満たす」は着点が容器状の物であることを指定している。

(24) 火に油を (*満たす／注ぐ)

これは特に着点に関する指定のない「注ぐ」に比べて着点の際立ちが高いことを示唆している。同様に次の例でも交替の容認性は影響の全体性から説明できる¹⁷。

(25) a. ペンキを壁につける

b. *ペンキで壁をつける

「つける」は着点の全体に影響を与えることを含意しないため、〈状態変化ドメイン〉が関与せず、(25b) のような表現も容認されなくなる。対して「ペンキで壁を塗る」の場合は壁の全体を塗ったという解釈が優勢であるため、動詞によって全体的な影響が指定されていると考えられる¹⁸。

8. まとめ

本研究では構文交替を、共起する格パターンによって動詞の中で異なるドメインが焦点化される現象として分析した。依存的な要素によって自律的な要素の中でドメインの焦点化が引き起こされるという Croft (1993) のモデルを格パターンと動詞に当てはめることによって、構文交替を作者で作品を表すようなメトニミーと類比的に考えることができる。前者は動詞と項の間での意味調整、後者は構文（格パターン）と動詞の間での意味調整である。

また本研究では動詞に関与するドメインを交替の可能性とは独立に判断する基準を示した。これによって動詞の交替可能性についての過剰な予測を抑えることができる。ただし現段階では全ての動詞の交替可能性を説明できる基準には達していないため、動詞の意味に関与するドメインの判定方法については今後さらなる検討を必要とする。

17 実際にペンキが付着している範囲が壁の一部でも全体でも (23a) の意味とは矛盾しない。

18 英語の壁塗り交替についても同様に分析がされている。John smeared paint on the wall / John smeared the wall with paint の対比においては前者では塗られる範囲が一部分でもよいが後者では全体である必要がある (cf. Anderson 1971, 岸本 2001)。

参考文献

- Anderson, Stephen. 1971. On the role of deep structure in semantic interpretation. *Foundation of Language* 7: 387-396.
- Clausner, Timothy, and William Croft. 1999. Domains and image schemas. *Cognitive Linguistics* 10 (1): 1-31.
- Croft, William. 1993. The role of domains in the interpretation of metaphors and metonymies. *Cognitive Linguistics* 4(4): 335-370.
- Croft, William, and D. Alan Cruse. 2004. *Cognitive Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goldberg, Adel. E. 1995. *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- Goldberg, Adel. E. 2006. *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Hopper, Paul J and Sandra A. Thompson. 1980. Transitivity in Grammar and Discourse. *Language* 56 (2): 251-299.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1999. *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thoughts*. New York: Basic Books.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundation of Cognitive Grammar (Vol. 1): Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Newman, John. 1996. *Give: A Cognitive Linguistic Study*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Pinker, Steven. 2013. *Learnability and Cognition, new edition: The Acquisition of Argument Structure*. Cambridge: MIT Press.
- 伊藤健人. 2008. 『イメージ・スキーマに基づく格パターン構文-日本語の構文モデルとして』 東京: ひつじ書房.
- 奥津敬一郎. 1981. 「移動変化動詞文--いわゆる spray paint hypallage について--」 『国語学』 127: 60-48.
- 川野靖子. 2021. 『壁塗り代換をはじめとする格体制の交替現象の研究』 東京: ひつじ書房.
- 岸本秀樹. 2001. 「場所格交替」, 影山太郎 (編) 『日英対照 動詞の意味と構文』 100-126. 東京: 大修館書店.
- 角出凱紀. 2023. 「AUTHOR FOR WORKS 再考」 『日本言語学会第 167 回大会予稿集』: 303-309.
- 西村義樹. 2002. 「換喩と文法現象」, 西村義樹 (編) 『認知言語学 I : 事象構造』, 285-311. 東京: 東京大学出版会.
- 日本語記述文法研究会. 2009. 『現代日本語文法 2』 東京: くろしお出版.
- 森山新. 2008. 『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得: 日本語教育に生かすために』 東京: ひつじ書房.

**Alternation as Metonymy:
Mutual Accommodation Between Verb and Construction Meaning**

Yukihiro Tomioka

This paper analyzes alternation phenomena, such as locative alternation, from the perspective of domain highlighting and argues that they fall under the category of metonymy in a broad sense. Japanese alternating verbs such as *nuru* (to paint) or *katazukeru* (to tidy up) involve both the domain of change of state and the domain of motion, with either domain being highlighted through accommodation with the meaning of the construction (case pattern). This process is similar to the principle underlying metonymy, such as AUTHOR FOR WORKS. In order to discuss this mutual accommodation process, this paper examines the semantic structures of verbs and case patterns involved in alternations from the perspective of cognitive linguistics.